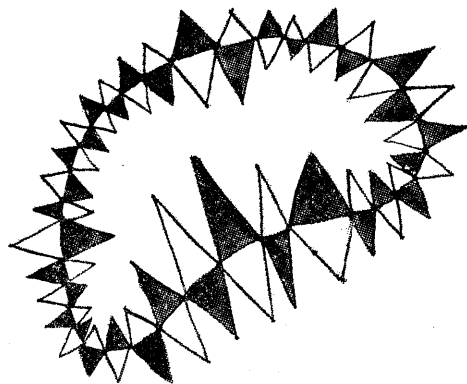


わたりあう関係

森下みさ子



六助は、後ろに手をまわすと、へっぴり腰のようになって、ひょいと赤ん坊を背負った。あやすようにゆうらゆるら、足で調子をとりながら歩きまわる。へそうらそら、オッパイのんでネンネしな——、ほら、オッパイのんで——へと、傍らの十郎が太鼓に合わせて謡いかける。「ほら、オッパイのんで——」と、すがるように催促するが六助はなかなか赤ん坊にオッパイをふくませようとしなない。「それっ、オッパイのんで——」と、今度はドスのきいた声。はじけたように六助は赤ん坊をおろして、胸に抱く。会場からは「よくやった。上手、上手。」と、笑いとともにも拍手が起こる。ただし、抱かれた赤ん坊は、逆立ち。足でオッパイを吸っている格好だ。「それじゃ赤ちゃん頭に血がのぼっちゃうでしょ。困ったもんだねえ。」という十郎のすっどんきょう

な声に笑い声はより大きくなって波立つ。

へはい、もう一度、オンブして——ネン
ネしな——へと十郎。「もう一度、オンブ」

……と、何を思ったのか、六助は逆立ちに抱いていた赤ん坊をポーンと高くほおり投げた。「ワァー」と大爆笑。「ちよっとお、あんたみたいなおかあさん、いないよ。」という十郎のせりふに、会場は笑いの渦になって大揺れだ。

ご安心あれ……赤ん坊は、布製の人形。とりかえても通じそうな名前であるが、六助が猿で十郎が猿まわしの親方である。早稲田銅鑼魔館という、猿には無縁の演劇場で、しかも階段状の会場狹しと座って見下ろしている観衆のいくつもの好奇の目を前にして、それでも六助はかなり上手に演じてみせたのだ。人形の赤ん坊のオンブ、酔っ払いの千鳥足、

鉄砲に打たれて倒れるところ……。その度に観衆は、「うまい、なかなかやる。」とうなずき、笑いながら、拍手を惜しまなかった。けれども……。爆発するように笑いが湧き起こって会場がどよめくのは、きまって六助が十郎の意図をはみ出る動きに出た時である。いくら促しても演技をしないと思っていると、シトシトおもらしをしていたり、急に人形をひつつかんでふりまわしたり、ほおりあげたり、一度などは十郎に牙をむいて踊りかかり、紐がちぎれそうなくらい左右に跳びまわったりもした。そういう時は、十郎も紐を持つ手に力をこめ、汗だくになって、なだめたり、おどしたり、と必死である。その一方で、間髪いれずに、観客をよりおもしろがらせるせりふもはさんでゆく。

観客が、こういう場面において、最もよく笑い、そして同時に心の深部をゆさぶられる

ような不思議な感動を覚えるのは、そこに過度のエネルギーが放出され、緊張がみなぎり、その刹那はじけとびちるような瞬間があるからだ。親方が教え、猿が教えられたとおり器用にやってみせる「演技」は、それなりの拍手を得るけれども、会場がどっと湧きたつのは、演技を越える瞬間である。オス猿の飼いならされることのない野性の力、人間の意図をはみ出る無意味で唐突な行為、それらが、用意された演技の枠をひき裂いて、舞台という空間を未踏の大自然に向って開いてしまふ。そのとき、私たちの裡に潜んでいた何か得体の知れない力が突きあげてきて、はき出され、空気を震動させる……不思議な笑いの発散だ。

けれども、それだけではない。舞台上ではもっと大変なことが起こっているのである。親方は、猿の力をなんとかしようと身体をは

る一方で、話術によって巧みに演技の流れをつくり出してゆこうとする。こっけいなオチをつけたり、猿の気持をおもしろおかしく代弁してみたり、自らを戯画化してみせたり、そうして次の演技へと繋いでゆき、「猿まわし」という一連の語りの時空をおさめようとする。この時、親方は用意された筋書きの伝え手ではなく、猿のダイナミックな生きた動きに抗いつつも、その力にこそ乗って、真新しい物語を生み続ける語り部である。野性の爆発と、それをなんとか一つの流れに乗せようとする物語りの抗力、徹底して制御を拒む身体の暴挙と、語り続けることをやめない言葉の術……舞台上にはとてつもない力が渦を巻き、観る者を身体ごとひきこんでしまふ。

日常的な挙動から大きくはみ出てわたりあう、そんな時の人と猿は神々しくさえある。今でこそ演劇用の小ホールで、つつましく座

った観客を相手にしているが、猿まわしはもともと、中世の古きから放浪を続ける大道芸人である。大空の下、風にさらされ、鶏や犬の鳴き声が遠慮なくきこえてくる路上で、うごめきざわめく人々をとらえつつ、いつてみれば何一つ準備や予測のできないところで、

その時々芸をこなしてみせてきた。そのよ
うな変異の大きい時空にさらされることによ
って、猿はある瞬間野性の力を発散し、猿ま
わしはそれをその場で語りおさめようとし、
より過激なエネルギーを放出しあったのであ
る。非日常的な時空を束の間持ちこんで、つ
むじ風のように去ってゆく彼ら芸人を、定住
する人々は「まれ人」として迎え入れ、「神」
の姿さえ重ねてみたという。彼らが神である
のは、「まれ人」であるからというだけでは
ないだろう。彼らは、野性と文化、身体と言
葉、逸脱と語り、寸断と連続という二つの力

がさかまく中で生きあうことにおいて、宗教
的体験にもまごうような一瞬を、観る者にも
たらずからにちがいない。

*

極最近目にする機会を得たこの白熱する舞
台に、私はふと大人と子どもの根源的な関係
を垣間みていた。もちろん、子どもが猿であ
り、大人は多かれ少なかれ猿まわしの役割を
引き受けているなどと、軽々しくいうことは
できない。両者の関係しあう意図も、存在の
意味も違うのだから。それでもなお、いまだ
社会や秩序のコントロールを十分には受けて
いない「子ども」という存在は、私たちの思
いを越えてはるかに強い野性の力を発散する
し、「大人」はそこにあるカタチを与えよう
とする存在であることは否定できないように

思う。たとえば、子どもが泣きわめく。暴れまわる。そういう時、傍らにいる大人はやさしくなだめすかすにしても、どなりつけるにしても、その行為をやめさせようとする。いや、もっと間接的であっても、そのワケを知ろうとしたり考えてみたりして、自分に納得のゆく言葉にうつかえようとする。もちろん、こうでない場合もたくさんある。けれども、基本的には「子ども」と「大人」の関係には、こういう対立が含まれていると思う。子どもが人間の社会で生きてゆくということ、どんな形にしても大人の側から何かしらの去勢を受けてゆくことに他ならないのだから。

それなら、そういう関係を認めた上で、「大人」と「子ども」がわたりあい生きあう、ポルテージの高い瞬間がもてないものだろうか。子どもの野性を無視してただの弱い存在

に思いこんでみたり、ましてはなっから押さえこんだりしないで、やさしく穏やかに、あるいは強く激しくやりあってゆく、そんな瞬間、瞬間。野性のはみ出す力がなかったら、そして、それを受けとめてはりあう力がなかったら、大道の芸に心の深部をゆさぶるようなでき事は起こらないのだから……。わたりあう関係はきつと、上・下や保護・被保護や対立の関係を越えるだろう。越えて、大空の下ではじけとぶような肯定的な笑いと、生まれたての感動をかきたててくれるのではないだろうか。私の身近にいる保育者の、子どもとの貴重で魅惑的なやりとりを目にし、耳にし、保育の意図を越えて思いもかけずたどりつくある地点の輝きに出会う時、ふと解き放たれたような、神性に触れような感動すら覚えるのは、そのためなのかもしれない。

(お茶の水女子大)